

二〇二七年度

吉祥寺湧水中学校 模擬入学試験問題

《 国 語 》

注意事項 じこう

次の注意をよく読んでください。

- 一. 始まりの合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題冊子は一冊、解答用紙は一枚です。解答用紙は問題冊子の中にはさみ込こみ込んであります。
- 三. 机の上には受験票と筆記用具以外のものを置かないでください。
- 四. 試験時間は五〇分間です。
- 五. 問題は 1 と 2 です。
- 六. 問題の内容についての質問はできません。
- 七. 記号・句読点がある場合は、字数に含みふくみます。
- 八. 困ったことがあったら、静かに手を挙げてください。
- 九. 終わりの指示があったら、すぐに筆記用具を置き、解答用紙を裏にして、問題冊子の上に置いてください。

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

朔と弟の新は、バスの事故に巻き込まれ、朔は目が見えなくなりしまった。新は、そのバスに乗ることになったのは自分のせいだと考え、期待されていた陸上選手としての道を捨ててしまいました。しばらくして、朔は、目の見えない人が走る競技「ブラインドマラソン」を始めます。朔は新に、「自分の伴走者になってほしい」と頼みました。二人は毎日のように練習を重ね、この日、大会に出場します。次の場面は、スタートの直前から始まります。

軽くからだを動かしてから、ゆっくりグラウンドを走った。走り始めてすぐ、グラウンドのコースを頭に入れておくよう新は朔に言った。スタート直後は、前後のランナーがミツシュウして走りにくいという、歓声やらなんやらで声が聞き取りにくくなるからだ。

「最初のカーブは九時の方向。角度があるけど、ここはまだ団子状態

になっているだろうから、ペースはかなり抑えて入ると思う。そこから六十メートルくらい直線で、あとは緩やかな左カーブが続いてから外苑の周回路に出る。グラウンドは人が多くて走りにくいと思うけど、外に出ればバラけるから心配ない」

「了解」

グラウンドにはすでに多くのランナーたちが出てきて、おのおのにアップを始めている。

マウンド周辺に設置されたステージでは開会式が始まり、主催者やゲストの挨拶が続いている。挨拶が終わるたびにバックネットのあたりから拍手があがる。

新は一周ごとに合図を出した。三周する頃には、カーブの角度も距離感も朔はおおよそイメージできるようになった。

「ラスト一周、ペースあげていこう」

小さく頷く。

新の声に朔の上半体がわずかに前傾になり、ピッチがあがる。すつ、とからだの前へ伸びる。

「十メートル先左カーブ」

ロープが動き、カーブに入る。いつもよりはっきりとしたロープの動きに、朔はからだを添わせるように足を運ぶ。

「直線」

張っていたロープが緩くなる。そのあととなだらかな左カーブが続く。

「ラスト、三十。レースではここから外に出るから」

はっきりと指示を出しながら、新は目の端で朔を見た。

「三、二、一」

新の声と同時に力を抜いて、ゆっくりとコースの端へ寄った。背中にうっすらと汗がにじむ。

いつの間にか開会式は終わって、会場にはケイカイン音楽が流れている。なんとなく祭りのような華やいだ空気を感じながら朔は呼吸を整えた。

「そろそろ並んでおうか」

新に促されてスタートゲートへ足を向けた。

「あ、境野さんたちだ。ずいぶん前の方にいる」新が踵を上げた。

「秋田さんたちは、早めに準備しておきたいタイプなんだろうな」

「そういえば、待ち合わせも時間よりずいぶん早くに来てたし」

「アップを始めるのも早かった」

朔はそう言って、ふっと笑みをこぼした。

「境野さんって、そういうところをちゃんと押さえてくんだよ」

「……な、朔は境野さんが目指してることって聞いたことある？」

「ん？」

「伴走者としてってやつ」

いや、とかぶりを振ると、新は口角^Aをあげた。

「伴走したランナーが、また次も走りたいと思えるレースをするのと、だって」

「ああ、うん」

「目標タイムで走ることでも、順位でも、完走することでもない」

「境野さんらしいね。でもそうだな、走る目的も、理由も、ひとりひとり違う」

「そう言った朔の横顔を見て、新はにっと笑った。」

「でもみんな、ゴールを目指してる。そこは一緒だよ」

どくつ。

朔の内側が鈍く音を立てた。

……ゴール。

「朔？」

朔の腕に新は肘を当てた。

「どうした？ 腹でも痛い？ もしかして緊張してきたとか？」

ふたりの横を、スタートゲートに向かうランナーたちが追い越して

いく。

……ゴール。

朔は薄く唇を開いた。

オレは、どのゴールを目指しているんだろう。目指してきたのだろう。

① ゴールが見えない。いや、見えるわけがないのだと朔は唇を噛んだ。

そんなことは、とつくにわかっていた。だって、最初から間違った方向へ向かって駆け出していたんだから。そのことに気づきながら、ずっと気づかないふりをしてきた。自分の内にあるものを、きれいなことばでコーティングして、正当化した。自分が傷つかないよう、汚れないよう、気づかないふりをしているうちに、それは都合よく自分の意識から消えていった。

朔は喉^{のど}に手を当てて、息を吸った。喉の奥^{おく}が小さく震える^{ふる}。

だけど、このまま気づかないふりをして、新を縛^{しば}って、その先に何があるんだろう。

あるのは、たぶん、きっと、後悔^{こうかい}だ。

「ごめん」

「え、なに？」

朔は浅く息をした。

「いつか新、言っただろ、オレのこと偽善者^{ぎぜんしや}だって」

「はっ？」

「あれ正しいよ。オレ、新が陸上やめたこと知ったとき、腹が立った」

どうしてそんなに腹を立てたのか、あのときは朔にもわからなかった。考えようとしなかった。ただ無性^{むしょう}に、猛烈^{もうれつ}に腹が立った。

②「オレがブラインドマラソンを始めたのは、おまえを走らせようと思

つたからだよ」

「そんなことわかってたよ。朔はオレのために」

「違う」ことばを断^たち、もう一度「違う」と朔はくり返した。

「そう思わせただけ。ただの欺瞞^{ぎまん}だ」

新の目がくつと見開いた。

「オレは、新が思ってるようないい兄貴でもないし、人のことを思いやったりできる人間でもない。嫉妬^{しつと}も後悔^{こうかい}もするし、恨^{うら}んだりもする。新のことだって」

「いいよ！ いいよ、そんなこと言わなくて。ていうかなんて言うんだよ、しかもいまってなんだよ」

「いまだから」

いまじゃなかったらオレは話せていない。

また気づかないふりをしてしまう。逃^にげてしまう――。

「意味わかんねんだけど」

新の声がかすれた。

「おまえに伴走を頼んだのは、オレのそばにいて、オレと一緒に走ることで、新が苦しむことがわかっていたからだ」

新を傷つけてやりたかった。失明したのは新のせいじゃない。事故だった。ただ運が悪かったただけだ。頭ではわかっていたつもりだった。それでも、病院のベッドの上でも家を離れてからも、もしも同じことが頭をよぎった。

新のせいにするなんてどうかしている。そんなことを思うなんて、頭がおかしくなったんじゃないかと自分を疑った。でも、頭ではわかってはいるはずなのに、気持ちがついていかなかった。どうしても、もしもと考え、それをあわててかき消して、また同じことを繰り返した。

時間とともに、身のまわりのことがひとつひとつできるようになり、視力に頼らず暮らしていくすべを覚えていった。もしも、という言葉が頭をもたげることほとんどなくなった。これなら家に戻っても、家族の荷物にならず生活できる。新と会っても感情が揺れること

はない。そう思って帰ったのに、梓から新が陸上をやめたことを聞いたとき、時計の針が□した。

あるとき、新がやめた理由を梓に問いながら、朔には察しがついていた。

オレが視力を失った代わりに、新は陸上をやめた――。

そういうことを考えるやつだとわかっていた。だけどそれは、裏を返せば単に楽になろうとしているだけのことではないのか？ 大切なものを手放し、失うことで、同じ痛みを負ったつもりになっている。

そんな弟を、あるとき激しく嫌悪した。

新を走らせる。走らせて、走ることへの渴望を煽ってやりたい。

失うことの、奪われることの苦しさはそんなものではない。それを味わわせたい――。

だけど、わかっていなかったのはオレだ。

オレは、新の苦しみをわかっていなかった。わかろうとしなかった。

「おしまいにする」

「はっ？」

「もう新とは走らない」

「なに言ってるの？」

「……勝手なこと言ってるのはわかってる。けど、ごめん。これ以

上、自分に幻滅げんめつしたくない」

新は朔が手にしているロープを握にぎった。

「きつかけなんて、どうでもいいじゃん。神様じゃないんだ、人間なんだからいろいろ思うだろ。オレが朔なら、どうなったかわかんないよ。まわりに当たり散らして、壊こわして、傷つけて、自分の中にこもって、なにもできなかったんじゃないかって思う。朔が思ったことはあたりまえのことだよ」

一気に言うと、新は大きく息をついた。

「それに、朔、それずっと続かなかっただろ」

朔の顔がぴくりと動いた。

「わかるよ、毎日一緒に走ってきたんだから。伴走頼まれたとき、オ

レ、マジでいやだった。でもいまはよかったと思ってる。朔が言ってくれなかったら、オレはいまだってきつと、朔からも走ることからも逃げてたと思う」

「だからそれは」

ううん、と新は首を振った。

「伴走引き受けてからも、ずっと朔のために走ってるんだって自分に言い訳して、ごまかしてた。それで納得なっとくしようとしてた。でも、たぶん違った。伴走者としては間違ってるし、オレは失格かもしれないけど、やっぱりオレは、オレのために走ってた。朔と走るのは朔のためじゃなくてオレのためだった」

新はロープを握にぎり直なおした。走ることは、孤独こどくだ。どんなに苦しくて

も、辛つらくても、誰だれかに助けてもらえるものではない。走れなくなったらその場に立ち止まり、倒れ込たおこむだけだ。それはブラインドマラソンも同じだ。ふたりで走っていても、伴走者が支えるわけじゃない。手を引くわけでも、背中を押すわけでも、代わりに走るわけでもない。

ふたりで走っていても、それは変わらない。

走るとはやっぱり孤独だ。

③孤独で、自由だ。

「行こう」

「オレは」

「最後ならそれでもいいよ。だけど、ここで棄権するとか言うなよな」

新は朔の腕をつかんで、スタートゲートへ足を向けた。

にぎやかな音楽が響いている。曇天の下、ゲート前は数百人のラン

ナーたちがひしめき、からだを動かしたりダンショウしたりしながら
スタートを待っている。

朔の背中に手を当ててインコース側に立つと、何列か前に内村の姿
が見えた。その背中を新はじつと見た。

あの人も一度は走ることをやめた人だ。あきらめて、自分で断ち切
ったのに、それでもまた走っている。オレも同じだ。

「オレ、やっぱり走ることが好きだ」

黙ったまま朔は小さく頷いた。

頬に日差しがあたり、朔は空を見上げた。

「前に朔、言っただろ、『新はいろんなものを見せてくれる』って。

あれ嬉しかった。オレ、ずっと朔の役に立ちたかったから」

新のことばを聞きながら、朔はそっと目を閉じた。

白く靄のかかったような薄曇りの空から、一筋光がこぼれる。

「だけど、逆だよ」

朔はぴくりと肩を揺らした。

④「オレが見えなくなってたものを、朔が見せてくれた」

驚いたように朔は新のほうに顔を向けた。

「オレ、走りたい。走るよ、逃げないで走る。で、強くなる」

——三十秒前です

※欺瞞……人の目をあざむき、だますこと。

※梓……朔のガールフレンド。

マイクの音が響いた。話し声や笑い声でにぎわっていたグラウンドが静かになった。

「強くなって、また朔とも走る。走りたい」

朔はこみ上げてきたものをこらえるように、もう一度空を見上げた。

重たい雲をこじあけるようにして、空が青く広がる。

見えるわけではない。

⑤でも、たしかにその光景が朔の中に広がっていく。

大きく息をつき、一度頷いて朔は正面を向いた。

ロープを軽く握り直す。

——イチニツイテ

一瞬の静寂のあと号砲が鳴った。

(いとうみく『朔と新』)

問1 傍線部 a 「ミツシュウ」、b 「ケイカイ」、c 「ダンショウ」

を漢字で書きなさい。

問2 傍線部 A 「口角をあげた」、B 「察しがついていた」の意味と

して、最もふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「口角をあげた」

ア かすかに笑みを浮かべた

イ 声をあげて笑い出した

ウ 不満そうに口を尖らせた

エ 言葉に詰まって黙り込んだ

B 「察しがついていた」

ア だいたい見当をつけていた

イ 人からはっきり教えられていた

ウ 全く予想もしていなかった

エ ずっと知らないふりをしていた

問3 本文中の にあてはまる語として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 加速

イ 減速

ウ 急停止

エ 逆回転

問4 傍線部① 「ゴールが見えない。いや、見えるわけがないのだ」

とありますが、このときの朔の考えとして最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 目が見えない自分には、他人と同じゴールを本当の意味で目指すことなどできないということ。

イ 伴走者である新がいなければ、自分はゴールまで決して辿り着くことはできないということ。

ウ 自分が間違った思いから走り始めたことに気づき、そのままでは何を目指して走ればよいのか分からないということ。

エ レースのゴールがあまりに遠く、最後まで自分の力で走り切る自信がないのだということ。

問5 傍線部②「オレがブラインドマラソンを始めたのは、おまえを

走らせようと思ったからだよ」とあります。この直後、朔は自分の行動を「ただの欺瞞だ」と言っています。朔がそう考えた理由として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 新をもう一度走らせたいという気持ちは本当だったが、新自身が走りたいと思っているかを確かめずに自分の考えを押しつけようとしたから。

イ 新が事故の責任を感じていることを利用して伴走を引き受けさせ、自分がブラインドマラソンを続けるために新を必要としていたから。

ウ 新のためにもう一度走らせようとしているように見せながら実際には陸上を捨てた新への怒り^{いか}から、走ることへの思いを強めさせ、失う苦しさを味わわせようとしていたから。

エ 新を再び走らせることによって、事故が起こる前の兄弟の關係に戻ろうとして自分が新を恨んでいることから目をそらそうとしていたから。

問6 傍線部③「孤独で、自由だ」とあります。このとき新が「自由

だ」と考えている理由として、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 走るときには、伴走者の指示に従う必要がなく、自分の好きな道を自由に選ぶことができるから。

イ だれかと一緒に走っていても、走るかどうか何のために走るかは、最後には自分自身で決めることだから。

ウ 走ることによって、事故への責任や兄に対する罪悪感をすべて忘れることができるから。

エ 伴走者がいれば、自分一人ではできないことも助けてもらいながら自由に行えるから。

問7 傍線部④「オレが見えなくなってたもの」とは何ですか。十字

程度で書きなさい。

問8 傍線部⑤「でも、たしかにその光景が朔の中に広がっていく」

とあります。この表現からわかる朔の様子として、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の負の感情を新が受け止めてくれたことで、これまで新を苦しめたことへの罪悪感から解放され、再び新と走れることに安心している。

イ 自分の負の感情も人間なら当然のものだという新の言葉を受け、自分を責めすぎていたことに気づき、ありのままの自分を受け入れようとしている。

ウ 自分の中の負の感情から目をそらし、進む先を見失っていたが、新と本心を伝え合うことで自分自身を見つめ直し、進む道を見いだし始めている。

エ 新が再び走りたいと思えるようになったことで、自分が新に伴走を頼んだことにも意味があったと気づき、それまでの行動を肯定的に捉え直している。

問9 本文では、新がブラインドマラソンの伴走者を務める中で、心

情が変化していく様子が描かれていました。新がそれまでの自分の考えをどのように捉え直したのかを明らかにした上で、それに近いあなた自身、または身近な人の経験を一つ挙げ、八十字以内で説明しなさい。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

島に住んでいる動物と大陸に住んでいる動物とでは、サイズに違いが見られる。典型的なものはゾウで、島に隔離されたゾウは、世代を重ねるうちに、どんどん小型化していった。島というところは、大陸に比べ食物量も少ないし、そもそもの面積も狭い^{せま}のだから、動物の方もそれに合わせてミニサイズになっていくのは、なんとなく分かる気がするが、話はそう単純ではない^①。ネズミやウサギのようなサイズの小さいものを見てみると、これらは逆に、島では大きくなっていく。島に隔離されると、サイズの大きい動物は小さくなり、サイズの小さい動物は大きくなる。これが古生物学で「島の規則」と呼ばれているものだ。

このような島の動物のサイズの変化の方向性は、化石を見るとよく分かる。大氷河時代は哺乳類^{ほにゅうるい}の時代とも呼ばれるが、時代が新しいた^Aめ、化石もゾウ^Aで地史もよく分かっており、この時代の島の哺乳類の化石を時間を追って見てみると、サイズの変化がはっきりと分かる。

大氷河時代には海面が下がり、多くの島が大陸とつながったが、深い海で隔てられていた島、たとえばセレベス島、地中海の島々、西インド諸島、カリフォルニアの沖合いの島々、などは島として残り、そこに閉じこめられたゾウやカバ、シカ、ナマケモノなどが小型化していった。

もっともインシヨウ^B的なのがゾウの例だ。島ではゾウはどんどん小さくなっていき、ついに、成獣^{せいじゆう}になっても肩までの高さが一メートル、ちょうど仔牛^{こうし}ほどしかないものが出現した。そのとき大陸では巨大なマンモス^{きょだい}がのし歩いていたのである。また、島のネズミはというと、逆にサイズがどんどん大きくなり、ネコほどもあるものが出現した。

島では、なぜこのようなサイズの変化が起こるのだろうか。一つは捕食者の問題だと思われる。島という環境^{かんぎよう}は、捕食者の少ない環境である。大きっぱな言い方をすれば、一匹^{いっぴき}の肉食獣^{にくしじゆう}を養っていくには

その餌として一〇〇匹近くの草食獣がいなければならない。ところが島は狭いから、草の量がたとえば一〇匹の草食獣しか養えないとすると、肉食獣の方は餌不足で生きていけないが、草食獣の方は生きていけるとい状況が出現する。つまり、島には捕食者がいなくなってしまうわけだ。こういう環境下で、ゾウは小さくなり、ネズミは大きくなる。

ゾウはなぜ大きいのだろうか。それはたぶん、大きければ捕食者に食われにくいからだろう。ネズミはなぜあんなに小さいのだろうか。それも捕食者のせいだろう。小さくて物陰にかくれることができ

ば、捕食者の目を逃れられる。

ゾウというものは見るからに偉大なものである。動物仲間でも、ゾウがくれば、どうぞどうぞと順番をあけて水を飲ませてくれる。だから大きければなんでもハッピーと、ちょっと見には見えるかもしれない。しかし、[※]第九章で見るように、ゾウの骨格系は重い体重を支える

ために、かなりの無理をしている。無理を押して捕食者に食われないよう、頑張って大きくなっているのである。捕食者がいなければ、なにもこんな無理をしてまで、大きいままではない。

大きいことにともなう犠牲はまだある。ゾウは非常に大きいことにもない一世代の時間が長く、その結果、突然変異により新しい種を生み出す可能性を犠牲にしている。非常に大きいということは非常に

 化しているとみなせ、これは進化の袋小路に入り込んだことを意味しているだろう。事実、ゾウの仲間で現在生き残っているのはインドゾウとアフリカゾウの二種類だけで、この仲間は絶滅へと向かっているものたちである。ゾウにしてもクジラにしても、巨大なもの

は、人間が獲る獲らないにかかわらず、近い将来の絶滅が運命づけられているもので、そういう意味でもキチョウな動物たちであろう。

一方、ネズミにしても、好きこのんでちんまりしているわけではないだろう。非常に小さいということは、しょっちゅう餌を食い続けな

ければならず、餌がちよつとでも見つけれなくなったら、すぐ飢えて死ぬ危険に直面する。これは苦しい。体のつくりにしたって、小さいことからくる無理があるだろう。小さければ心臓はいつも早鐘はやがねのように打ち続けるわけで、これは心臓や血管に大きな負担をかけることかもしれない。

偉大に見えるゾウも、できれば「普通ふつうの動物」にもどりたいたのであろう。ネズミにしたってそうだ。だからこそ、捕食者という制約bがなくなると、ゾウは小さくなり、ネズミは大きくなって、哺乳類として無理のないサイズに戻もどっていく。これが「島の規則」の一つの解釈かいしゃくである。

動物には、その仲間の体のつくりや生活法から生じる制約がある。だからサイズにしても、むやみと変えられるものではなく、ある一定の適正範囲はんいがあるものと思われる。その適正範囲の両端りょうたんのものは、何らかの無理がかかっていると見てよいのではないか。

※第九章……このあとに続く章を指す。

問1 傍線部 a「典型」、b「制約」の読みをひらがなで書きなさい。

問2 傍線部 A「ホウフ」、B「インショウ」、C「キチョウ」を漢字で書きなさい。

問3 本文中の にあてはまる語として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 高度 イ 巨大 ウ 特殊 とくしゆ エ 一般 いっぽん

問4 傍線部①「話はそう単純ではない」とありますが、それはなぜですか。理由の説明として最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 島は食物が少ないので動物はみな小さくなると思いがちだが小さな動物は逆に大きくなるから。

イ 島は食物が少ないので動物はみな小さくなると思いがちだがどの動物も大きさは変わらないから。

ウ 島は環境に恵^{めぐ}まれているので動物はみな大きくなると思いがちだが、大きな動物は逆に小さくなるから。

エ 島は環境に恵まれているので動物はみな大きくなると思いがちだが、どの動物も大きさは変わらないから。

問5 大きいこと・小さいことにともなう「無理」や「犠牲」として本文に書かれているものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 重い体重を支えるため、骨格に負担がかかる。

イ 島では大きい動物は小さくなり、小さい動物は大きくなる。

ウ ゾウは、大きければ捕食者に食われにくい。

エ 世代交代が遅^{おそ}く、新しい種が生まれにくい。

オ 餌をたえず食べ続けないと、すぐ飢えてしまう。

カ ゾウは、ほかの動物に水を飲む順番をあけてもらえる。

キ 心臓が速く打ち続けることによって、心臓や血管に負担がかかる可能性がある。

ク 島は、捕食者の少ない環境である。

問6 傍線部②「島には捕食者がいなくなってしまうわけだ」とあり

ますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 島は狭く、草の量も限られているため、肉食獣を養うほど多くの草食獣が生きられず、肉食獣が餌不足になるから。

イ 島は狭く、草の量も限られているため、草食獣どうしが餌を奪い合い、肉食獣より先に草食獣がいなくなるから。

ウ 島では食物が少ないため、草食獣の体が小さくなり、肉食獣が草食獣を見つけにくくなるから。

エ 島は大陸から離れているため、新しい肉食獣が渡^{わた}ってくることでできず、草食獣だけが増えていくから。

問7 本文によれば、ゾウが大きく、ネズミが小さいことには、どのような共通した理由があると考えられますか。最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 限られた食物の奪い合いを少なくするため。

イ 捕食者に食べられる危険を少なくするため。

ウ 体への負担をできるだけ小さくするため。

エ 新しい種類の動物が生まれやすくするため。

問8 筆者は、動物の大きさには「適正範囲」があると述べています。これはどのような考えですか。その考えを明らかにした上で、あなたの生活や身の回りで、その考えがあてはまると思う例を一つ挙げ、九十字以内で説明しなさい。

す。これはどのような考えですか。その考えを明らかにした上で、あなたの生活や身の回りで、その考えがあてはまると思う例を一つ挙げ、九十字以内で説明しなさい。